



森の演出家 大槻幸一郎

団塊の世代

戦後生まれの「団塊の世代」にとって、ペコちゃんは目の大きな可愛らしさが充満した西洋の女の子。男性にとって、一度は恋してみたい女の子の象徴的なキャラクターである。甘いおやつといえば、白粉の吹いた「干し柿」や「塩昆布」ぐらいしかない子供たちにとって、森永・明治・グリコ・カバヤそして「不二家」は忘れられない会社名である。中でもキャラメルにオマケ付きというアイデアは、心がとろけるような魅惑的な甘さに加えて子供たちの心に製造会社をしっかりと記憶させるに十分すぎる演出であった。

しかし、昨今の子ども達を主役にした多くの悲慘な事件は、キャラメルの甘さに感涙していた世代にはあまりにも衝撃的である。甘さ、便利さを戦後に享受し続けてきた我々「団塊の世代」は、ひょっとして次世代に引き継ぐべき「忍耐」という、人間しか持たない人間がゆえに大切にされるべき「精神力」をどこかの歴史の道端に置き忘れてきたのかもしれない。

さて、戦争による軍需用材の調達のため、過度な伐採によって荒廃した日本の森林を再生すべく、先人達によって懸命に植林されたスギ、ヒノキの人工林は今、危機的状況にある。外国から輸入される木材が、質・値段・入荷スピード等において国産材よりも優れているとの評価が定着してしまった。国産材を伐採して市場に出したくとも値段が安すぎて出せない。仮に切っても再び造林するほどの利益が出なくて、伐採後地は放置され裸地化した雑草の山と化する。人手の入らない薄暗い人工林の森は、人目につかぬ事をいいことに産業廃棄物の不法投棄の場となり、「俺の裏山、誰がゴミ山にした」と嘆いてももう遅いのである。先人達の汗の結晶である人工林は、春先に花粉症の発生源として皆に嫌われているが、これは森の管理から遠ざかっている人類に対する森たちからの無言の警告である。こんな手入れの行き届かない里山に、市民の力が入ってもらおうと発想されたのが「千葉県里山条例」である。山持ちさんと、里山整備団体とが協定を結び、県は技術・資金の面で支援する。平成17年12月末日現在、41団体が48件の協定を締結し里山整備に活動している。

大槻 幸一郎(千葉県副知事)